

## 第1 事件被上告人弁論要旨

高井ツタエ

1 私は被爆者です。しかし、私はそのことを隠して生きてきました。もうずいぶん昔のことですが、結婚を夢見ていた人に突然、被爆者だからと身内に反対する人がいて結婚できないと告げられました。そのことがあって、被爆者である過去を捨てるために、私のことを誰も知らない名古屋に移り住み、長崎を忘れようと懸命に働きました。お見合いで結婚できましたが、夫にも被爆者であることを明かせませんでした。結局、被爆を知らないまま亡くなった夫には、毎日仏壇に手を合わせて謝り続けています。

私が被爆者であることを明かし、原爆症認定を申請し、裁判をしようと思いついたのは、東日本大震災がきっかけでした。テレビで、街に襲いかかる真っ黒な津波を見て、私には被爆したあの日のことが重なって、思わず狂ったように「早く逃げて！」と叫び続けていました。そして、あの福島原発事故です。あの日から、私は被爆者として生きていこうと思いました。

2 昭和20年8月9日、私は爆心地から5.4キロ離れた自宅の中にいました。当時9歳でした。突然、白い光が押し寄せ、周りが見えなくなり、母の「伏せい！」という言葉で伏せたところに、爆風が押し寄せ、ラジオが飛んで窓を突き破り、家の中の土壁も崩れました。

夜勤から帰ってきた父が、いとこの照子が心配だと、長崎市の中心部に行くと言いました。姉と私も、テルちゃんのことを心配で、父について行きました。私は、少し前に浦上に引っ越していった親友のチヅちゃんのことでも心配でした。

父の背中越しに見た長崎の街は跡形もなく、駅から向こうは、火事とがれきで足を踏み入れることも困難でした。すれ違う人たちから口々に、「これ以上は行けない、戻れ」と言われ、爆心地から2キロほどの銭座町から引き返しました。あの地獄絵図を思い出すと、今でも怖くて震えが出てきます。

3 家に戻った後、私はひどい下痢に襲われました。姉の体調は私より悪く、1か月近く寝込み、その後も学校でもよく倒れていました。日通に勤めていて重い荷

物を担いでいた父も、体調が悪くなり、仕事が続けられなくなりました。被爆してから、父も姉も私も、原因が分からない体調不良に苦しめられ続けました。

この裁判で、ともに闘った森さんや川本さん、また他の被爆者も、私たちと同じように、原因が分からない体調不良に苦しみ、仕事も続けられず、またそれが理解されないことに苦しんできたことを知りました。また、被爆者は、自分の被爆が子や孫にも影響しないのかという不安も抱えています。被爆者はみな、苦しんで生きてきたのです。

- 4 ですから、どうか被爆者を助ける判断を下してください。そのことが、原爆に苦しめられてきた被爆者に希望を与えてくれます。

そして、私は、原爆のような残酷な兵器が二度と使われることなく、世界から無くしていきたいと願っています。そのことが、原爆によって命を奪われ、健康を奪われ、生活を奪われた被爆者の苦しみに報いることになると思っています。

以上